

引卒シテ、信濃へ越ント欲シテ、軍兵ヲ催ストイヘドモ、資永任國ノ越後ハ、木曾押領ノ間、不及國

務、北陸ノ諸國、木曾ニ恐テ一人モ不相隨トゾ申タル、此狀ニ驚テ、同二十八日、重テ左馬頭行盛、薩

摩守忠度、大將軍トシテ數千騎ノ軍兵ヲ相具シテ北國へ發向ス、

〔薩戒記〕應永卅二年二月十六日丁巳辰刻許下人云、小川宮

寺院第二御子、内御一帖爲儲君、近比勸修寺中納言經興卿奉養育件御所彼納言

家也、即奉宿者也、今曉薨御之、頓死也云々、仰天馳參略申抑彼御病事、雖醫師號三位、實名參入依御脈令斷

給不知其實、又日來無御不豫事、或云御内瘡歟、或云大中風歟、又云聞食御毒歟、是兩三外無推量云云、御身色紫也云々、三位法師雖奉御灸三ヶ所御頂上、兩大指上無其益云々、則人々相率參院、以季保卿申入之間、叡心憫然、東西不辨御式也云々、仍各退出、頃之或人曰、宮御方御脈出來之由風聞者、仍又馳參之處浮言也、

〔治憲公御年譜附錄一〕野芹

寛政九年の春、勝熙君、御不例御快氣御床退御祝之節被進之、

先達ての御病症、御輕症とは申ながら、類中風の御症にて、中々早速御全快は有之間敷、凡六七日の御手間取にも可有之と、醫師共も申聞、大殿様にも甚だ御苦心被遊、隨て我々共も痛心いたし候所、御療養被相盡候とは申ながら、以の外不日御順快、既に今日御床退も被成候事、御一己の御仕合は不及申、第一大殿様御老心を被安候こと、我々どもまで大悅不過之事に御坐候、

〔柳營諸舊例的三〕文化二丑年二月三日

月代願

寄合長田三右衛門

私儀中症、今以相勝不申候ニ付、御番醫師成田筑築藥服用仕罷在候處、此節逆上強御座候ニ付、月代仕候ハ、可然と宗筑申聞候間、依之爲養生月代仕度奉願候以上、

二月三日